

## ベルギー・フランドルの高等教育機関における外国語教育の現状： KUL 人文学部および同大学学部間現代語施設を中心に

川村三喜男

1. 序
2. フランドルの高等教育概観
  - 2.1. 高等教育の 2 つの系列
  - 2.2. Bachelor-Master 制度
  - 2.3. 高等教育の系列と学位の関係
3. KUL (Katholieke Universiteit Leuven) における外国語教育
  - 3.1. 人文学部における外国語教育
    - 3.1.1. 「言語文学士」のための外国語と「言語地域学士」のための外国語
      - 3.1.1.1. 「言語文学士」のための外国語
      - 3.1.1.2. 「言語地域学士」のための外国語
  - 3.2. KUL 人文学部の外国語教育への CEFR 適用状況
  - 3.3. 学部間現代言語施設における外国語教育
    - 3.3.1. 学部間現代語施設における英語、フランス語教育
    - 3.3.2. 外国人学生のためのオランダ語教育
      - 3.3.2.1. エラスムス学生のためのオランダ語
      - 3.3.2.2. 外国語としてのオランダ語
4. 結語

### 1. 序

本報告は、ベルギー・フランドル共同体の高等教育機関における外国語教育の現状、および CEFR のそれへの適用状況につき、2009 年 8 月 25 日より 9 月 3 日に科学研究費補助金を用いて、フランドル行政府教育大臣官房、ルーヴァン大学 (KUL) の人文学部と学部間現代語施設にて実施した現地調査から得られた口頭、および文書データ、さらに現地調査以降の小規模な推移につき KUL より提供されたデータの分析をその中心的な内容とし、フランドルの大学、特に KUL における外国語教育の特性を見出すことを試みる。

### 2. フランドルの高等教育概観

#### 2.1. 高等教育の 2 つの系列

中等教育を修了し、さらに勉学を継続することを望む者 (通常 18 歳以上) は、大学及びその提携校となっている高等専門学校(hogeschool)、ないしそうではないものを含む高等専門学校のい

ずれかに進学することができる。大学はフランドル共同体の版図内に7校あり（ゲント大学＝旧ゲント国立大学、教育の連邦化により現在の名称になる；ルーヴァン・カトリック大学（以下 KUL と略記）；ブリュッセル自由大学(VUB)；アントワープ大学、ブリュッセル・カトリック大学；ハッセルト大学及びリンブルフ・トランスナショナル大学)、後者2者は大学としての発足も近年のことであるが、これらを除く4校は総合大学である。一方、高等専門学校は22を数え、それぞれが提供している教育分野は限定されている。たとえば KUL と提携関係にあるレシウス高等専門学校(Lessius Hogeschool)は、ビジネスと応用言語学に特化された教育機関である。

## 2.2. Bachelor-Master 制度

フランドルにおける公的教育の最終責任者であるフランドル共同体(Vlaamse Gemeenschap/Flemish Community)は、「フランドルにおける高等教育の構造改革に関する2003年4月4日の共同体法」において、従来大学が授与していた「候補」(kandidaat)と学士(licentiaat)の2つからなる学位の序列を、学士(bachelor)と修士(master)に改めることを定め、また旧制度の高等教育で授与されていた諸学位と bachelor、master との対応関係を規定した。これはボローニャ宣言(1999)の4年後である。この共同体法に従い、フランドルの高等教育機関は2004/2005年度より、次第にそれらが授与する学位の制度につき、Bachelor-Master 型への移行をはじめ、修士課程が作られて、現在では旧制度の学位を授与する高等教育機関はない。なお、ベルギーにおける最高学位である「博士」(doctor)については、共同体法は何らの変更も規定していない。

## 2.3. 高等教育の系列と学位の関係

フランドルの中等教育においては、総合教育、芸術教育、技術教育、職業教育の4つの系列が区別されることには、すでに川村(2009)で触れたが、高等教育は「アカデミックに方向づけられた学士」、「修士」の学位を授与する大学、および大学と提携関係にある高等専門学校、および「職業的に方向づけられた学士」の学位を授与する高等専門学校の2つの系列を区別する。なお、中等教育を修了した者は、その出身系列にかかわらず、原則的に大学/大学と提携関係にある高等専門学校、および、そうではないものを含む専門学校のいずれをも進学先に選ぶことができる。但し、技術、職業教育の中等教育を終えた者が大学に進学することは一般的ではない（ドゥヴォス教育大臣副官房長による）。

大学、および大学と提携関係にある高等専門学校においては最低4年間の在学中に最終試験を含め、要求される数(180)の単位を取得した学生には、「アカデミックに方向づけられた学士(=bachelor)」の学位が授与される。この学位を持つ者はさらに勉学を継続し、少なくとも60単位を履修すれば、「修士(=master)」の学位を得る。更に少なくとも60単位を履修すれば、「修士の後の修士」(master na master)の学位が得られる。もちろん、博士号は大学からのみ授与され、高等専門学校はこの学位を授与することはできない。

一方、高等専門学校の学生は、少なくとも180単位を履修すると、「職業的に方向づけられた学士(=bachelor)の学位を授与される。そののちさらにこのタイプの高等専門学校に在籍して勉学

を続け、少なくとも 60 単位を履修すれば「学士の後の学士(bachelor na bachelor)の学位が与えられる。「職業的に方向づけられた学士」の学位を持つ者は、大学の提供する「切り替えプログラム」(schakelingsprogramma/switching programme)で勉学をした後、修士取得に向けた勉学を始めることができ、その後は大学ないし大学と提携関係にある高等専門学校で教育を受け始めた学生と同じ扱いを受けることができる。以上の記述を図式化すると付録のようになる(Vlaamse Overheid 2006 より部分を転載した)。

登録学生数については、2011 年 10 月 31 日の時点で、アカデミックに方向づけられた学士をめざす者が 110,946 名、職業的に方向づけられた学士をめざす者が 101,289 名と、両者に大きな差はないが、高等専門学校の学生に登録されている者が 132,741 名、大学に登録されている者は 86,267 名と前者が後者の約 1.5 倍になっている (Vlaamse Overheid 2011 の統計に基づく)。

### 3. KUL (=Katholieke Universiteit Leuven) における外国語教育

KUL(対外的には「(ローマ・)カトリックの」を落とした University of Leuven、すなわちルーヴァン大学、と名乗っている。KUL および KULeuven はこの大学のベルギーにおける略称である)は、設立母体がローマ・カトリック教会であるが、この大学に限らず設立母体が国家、ないし共同体であるか否かに関係なく、そこに勤務する教職員は原則として共同体の公務員というステータスを持ち、給与は共同体から受けているため「私立大学」とは性格を大きく異にする。

ルーヴァン大学は 1425 年にルーヴァン市およびブラバント公爵により設立され、当時のローマ教皇の認可を得た、北部ヨーロッパでもっとも長い歴史をもつ大学の 1 つである (現存するカトリック大学としては世界最古)。創立当時の 4 つの学部のうちの 1 つである学芸学部( Artes=Arts)が、現在の人文学部(Faculty of Letters)の前身である。この大学では創立以来、当然のことながらラテン語で教育が行われていたが、国民主義の勃興とともにラテン語はベルギーが独立した 1830 年にその教育言語としての役割をフランス語に譲った (Charles and Verger 2007)。更に第 1 次世界大戦の前後、フランドル民族主義運動が勢いを増すと、オランダ語で行われる授業が次第にその数を増し、1936 年には正式に、2 言語で並行的に教育が行われる大学となった。しかしフランス語で授業を行う教員は 1968 年にブリュッセルの南方にあるオッティニー-Ottignies (この地方自治体の現在の名称はオッティニー=ルーヴァン・ラ・ヌーヴ) にキャンパスを移動し、UCL(Université Catholique de Louvain)という別箇の大学になったため、現在は特に学士取得以上のレベルの授業 (オランダ語のほか、英語が教育言語として使われることが多い) と、以下に詳しく見る一部の外国語の授業を除き、大部分の授業がオランダ語で行われている単一言語大学の性格が濃い。教育言語をオランダ語から英語に切り替えることは、ベルギーの言語事情 (川村 2009 参照) を考えれば、容易ではないことが推察される。

KUL の学生数は 2005/06 年度において 22,206 人にのぼり(Vlaamse Overheid 2005/2006)、これはフランドル 7 大学中最大で、人文、自然、医学の 3 つの系統にわたる 15 学部を擁する典型的な総合大学である。

### 3.1. 人文学部における外国語教育

KUL 人文学部では、考古学、芸術学、音楽学、史学、言語文学、言語地域の6つの分野において教育が行われているが、以下の項では、このうち言語文学と言語地域の分野における外国語教育について記述する。人文学部のこの2つの教育分野は、外国語教育にもっとも力を入れている場である（もちろん、他の諸学部においても英語、フランス語、ドイツ語を中心に、それぞれの学部の教育目標に合致した外国語教育が行われている）。なお、KUL には、国際コミュニケーション学部に対応するような、コミュニケーション・スキルとしての外国語のみを中心とする教育を行っている学部はない。このような教育は、フランドルにおいては、もっぱら高等専門学校に委ねられている。

#### 3.1.1. 「言語文学士」のための外国語と「言語地域学士」のための外国語

KUL の人文学部では言語に関して「言語文学士」と「言語地域学士」の2つの学位を授与している。学生がどちらの学士号の取得を希望するか、そしてどちらのコースを選択するかにより、外国語教育は形式的にも内容的にも異なる。

##### 3.1.1.1. 「言語文学士」のための外国語

「言語文学士」の学位取得を目指す学生(2011年10月における登録者数は Vlaamse Overheid 2011 によれば 980 名) は第1年次より第3年次にかけて、「文化」「思想」「一般言語学」「一般文学」「専攻モジュール」「選択モジュール」のグループに属する共通科目(最低 68 単位)のほか、2つの言語モジュール(最低 56 単位 x2)を履修する。2つの言語モジュールの義務的履修は KUL だけでなく、言語文学専攻課程があるフランドルの5大学すべてで行われている。

各モジュールは、「文学」、「(個別)言語学」(たとえば英語学)および「言語とテキスト」の3つの科目から構成されるパッケージになっている。これらの科目のうち現代語5つはいずれも、少なくともシラバスの記述では、2011/12 年度において、文学、個別言語学、言語とテキストのいずれも、オランダ語を母語とする教師の担当するものであっても、ネイティブ・スピーカー教師、ないしそうした教師を含むチームの担当するものであっても、第1年次から学習対象言語を教育言語として教えられる。

このような形で学生に提供される現代外国語は、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語の5つであり、これに加えてフランドルの公用語であるオランダ語と、2つの古典語、すなわちラテン語と古典ギリシャ語である。一見してわかることだが、モジュールの形で履修される外国語は伝統的に西ヨーロッパの言語とされているものと古典語である。「言語文学」のコースを履修する学生はこれらの言語のうち、例えば英語とラテン語のように、少なくとも2つを学ぶのであるが、ギリシャ語、イタリア語、スペイン語の3つのうち2つを組み合わせることはできない。

上にあげた3つの科目のうち、本科研の研究対象にもっとも近いものが「言語とテキスト」である(オランダ語モジュールでは「言語マスター」taalbeheersing と呼ばれている)。これは、現代

語のものに関しては、学生が実用的な言語能力を獲得し、特に言語を分析するのみでなく、正しく話し、書くことができるようにすることを目標とする。そのため、ビジネス分野を含むさまざまな種類の文章を作成すること、リスニング、リーディング、プレゼンテーションの演習が、多くの場合複数の教員から成るチームの指導下に行われる。また、スペイン語・文学、イタリア語・文学については、これらの言語の世界への導入的科目も言語モジュールの科目として開講されている。これら2つの言語は、英語、フランス語、ドイツ語と異なり、ベルギーの隣国で使われているものでなく、また中等教育で学ばれることが一般的でないためであると考えられる(川村2009 参照)。フランス語・文学を専攻することを望む外国人学生、特にフランス語の能力が概してベルギー人に劣るオランダ人学生には、準備的なコース(後述 3.3.1.参照)を履修することが勧められている。古典語のモジュールでは、当然のことながらリーディングに重点が置かれ、また既修者と未修者の間では異なった科目が履修される。また、これら2つの古典語は、現代語とは異なり、オランダ語を教育言語として教えられる。

「(個別)言語学」は、言語の文法的構造についての入門的知識が与えられ、また音声、意味についても学ばれる。「文学」では、作品の分析、文学史、他のジャンルとの関係について授業が行われる。

第1~2年次におけるこれら3科目への単位配分は次のとおりである。なお、いずれの科目にも原則として週1回120分の授業が充てられている。

文学と個別言語学には、より特殊なテーマをより深く学習させることを目標にした科目が、フランス語、オランダ語、英語、ドイツ語において開講されており(たとえば「英語学Ⅲ：共時・理論」、「フランス文学Ⅲ：中世文学とテキスト批判」など)、これらも言語モジュールに配属されているが、下の表にこれらの科目は言及されていない。

表1：言語モジュールと履修単位数

	文学	個別言語学	言語とテキスト	計
英・仏・独	6	6	8	20
伊・西・	6	6	8	20
希・羅	8	6	6	20

第3年次においては「言語とテキスト」の授業はなく、外国語に関しては文学と(個別)言語学の授業のみが開講される。それぞれ8単位であり、1年次から3年次にかけて1つの言語モジュール最低56単位、これを2モジュール履修することになり、最低112単位を取得する。これに共通科目を履修して得た68単位を加えれば、学位最低条件である180単位の履修が実行されたことになる。

オランダ語の「言語マスター」は、それぞれ第1年次、第2年次に4単位が配当されており、どちらの科目を受講するにも、母語話者のオランダ語能力が必要である。

なお、「言語文学士：第3、第4言語」のためのコースも開設されており、学生は上記7言語モジュールから1つ、56単位を履修することが要求されている。

上記8言語のほかに、言語文学士号取得をめざして学ぶ学生のために、現代ギリシャ語（2段階、各4単位）、ポルトガル語（2段階、各4単位）、スウェーデン語（2段階、各4単位）、スワヒリ語（4単位）、およびサンスクリット（4単位）が、論理学、言語哲学、歴史諸科目、文学諸科目などとならび、「選択科目」として開講されている。このうち、前者3言語の授業は、学習される言語が教育言語であるが、スワヒリ語とサンスクリットはオランダ語を使って教えられる。

### 3.1.1.2. 「言語地域学士」のための外国語

ロシア語、中国語、アラビア語、日本語など、伝統的にヨーロッパの外の言語とされてきたものは、6つの独立した言語地域コース（スラヴ学・東欧学、中国学、アラブ学・イスラム学、古代近東、日本学の諸課程に区別される）において学ばれ、学生(Vlaamse Overheid 2011.によれば6課程あわせて511名、うち最大のもの日本学の278名)は当該プログラムを修了すると、「～学（たとえばスラヴ学・東欧学）言語地域学士」の学位を授与される。これらの課程において言語は英語やフランス語のように、3つの科目からなる言語モジュールとは異なる形態で提供され、その形態は課程により異なる。例えばスラヴ学・東欧学課程においては言語科目はモジュールを構成しておらず、共通科目の一部になっている。この課程では卒業に必要な180単位のうち72単位を言語科目にするよう義務付けられ、ロシア語学(8単位)、ロシア語マスター(1年次12単位、2年次12単位、3年次8単位)、ポーランド語（1年次12単位、2年次12単位、3年次8単位）が外国語科目として教えられている。一方、中国学課程においては言語科目はモジュールを構成しており、86単位を言語モジュールから取得することが義務づけられ、中国語学(1~3年次にそれぞれ8単位)、現代中国語練習（1年次24単位、2年次15単位、3年次15単位）、古典中国語（1年次4単位、2年次）が教えられている。

このカテゴリに属する5課程で教えられている外国語は次の通りである：

スラヴ学・東欧学：ロシア語、ポーランド語

中国学：現代中国語、古典中国語

アラブ学・イスラム学：標準アラビア語、いくつかのアラビア語地域変種

古代近東：(a) エジプト学：エジプト語、コプト語；(以下選択科目) 古典ギリシャ語、現代標準アラビア語

(b) シリア・メソポタミア：バビロン語、シュメール語（以下選択科目）アラマイ語、ウガリット語、古典ギリシャ語

(c) シリア・パレスティナ：ヘブライ語、(以下選択科目) バビロン語、現代標準アラビア語、アラマイ語、ウガリット語

日本学：日本語、古典中国語、古典日本語（文法のみ）、朝鮮・韓国語（副専攻語）

これらの言語は、いずれもオランダ語を教育言語として教えられている。なお、これらの課程

に登録している学生は英語やフランス語などの科目を履修することは義務付けられていない。また、セルキュ博士によれば、アジアの言語を2つ以上学んでいる学生はいないとのことである。

### 3.2. KUL 人文学部の外国語科目への CEFR 適用状況

受講の可否の判定と成績評価において、もっとも CEFR が広範で統一的な役割を担っている外国語は英語である。第1年次第1セメスターの英語モジュールにおける「言語とテキスト」においては、学生の英語能力レベルを発音、形態・統語、語彙につき、CEFR の B2 に高めるという目標が設定されている。教育言語は英語とオランダ語が併用される(2011/12 年度では英語のみ)。英語モジュールに登録できる学生は B1 レベルの英語能力を要求される。そのため、中等教育において英語を履修しなかったにも拘わらず、英語をこの形で学ぶことを望む学生に対して、人文学部は英語圏の国、ないし民間の外国語学校であらかじめ英語を学んでおくよう勧めている。なお、KUL 人文学部准教授リース・セルキュ博士によれば、KUL 人文学部に入学してくる学生の英語を話す能力は平均して B1、書く能力はこれより低いとのことである。第2セメスターにおける「言語とテキスト」では到達目標としての CEFR に基づいたレベルは規定されていないが、学生のコミュニケーション能力、特に読むことと書くことについての拡張がめざされている。第2年次においては、教育言語として英語のみが用いられ、受講できる学生の英語能力は B2 と規定されている。そしてこの年次の目標は、学生の英語能力を語彙、文法、口頭で、および書いて表現するスキル、リーディングにおいて C1 まで高めることに設定されている。

フランス語モジュールの「言語とテキスト」では、第1年次の目標が、学生のフランス語能力を B2 にまで高めることに設定されており、情報を伝えるタイプの文章および口頭のディスコースの産出、文法と語彙の習得、言語的知識と言語能力を関連付けさせること、の3点に重点が置かれた教育を施している。第2年次の到達目標については CEFR は参照されていないが、理路整然とした文章を書くこと；対照言語学（オランダ語とフランス語）的な観点からフランス語文法を理解すること；フランス語の口頭能力、すなわち訛りのない発音の習得とフラマン人に特徴的な音声学的エラーの分析、与えられたトピックについての構造をもった説明ができるようになること、の3点に重点が置かれている。フランス語フランス文学をこの大学で専攻する学生の多くが卒業後、中等教育のフランス語教師になることを考えるとオランダ語との対照、オランダ語母語話者のフランス語発音を重点項目にしている理由がわかる。

なお、セルキュ博士は、フランス語の本格的な習得を志す者は、KUL ではなく、フランス語圏にある UCL で学ぶ傾向が強いことを指摘している。これとの関係から、経済学部の2年次フランス語は、UCL で行われていることを付記しておく。

ドイツ語モジュールの「言語とテキスト」第1年次においては、最初のテスト・スコアが B1 でなければならない、という点においてのみ CEFR が参照されている。またスペイン語の「言語とテキスト」第1年次では到達目標が A2 とされている一方、イタリア語の対応科目においては、いかなる形でも CEFR は参照されていない。

以上を表にあらわすと、次のようになる：

表2：「言語とテキスト」と参照されるCEFRグレード

	1年次	2年次
英語	B1→B2	B2→C1
フランス語	→B2	—
ドイツ語	B1→	—
イタリア語	—	—
スペイン語	→A2	—

ロシア語、中国語など、「言語地域学士」取得を目指す学生の学ぶ諸言語については、受講の可否の判断、成績評価のいずれについてもCEFRは参照されていない。

### 3.3. 学部間現代語施設における外国語教育

学部間現代語施設(Interfacultair Instituut voor Levende Talen、略称ILT)は、学位を授与することはできないが、履修証明書を発行することができる、KUL内の外国語教育を学内の他の部署からの要請により担当する独立した部署であり(研究活動は行われていない)、教員の多くはこの部署の専任である。ただし、人文学部を含む諸学部の外国語教育の一部(「言語とテキスト」および「(個別)言語学」に相当するもの)ないしすべては、この施設でおこなわれている。前項で述べた人文学部の外国語科目のほかには、法学部の「法律英語」、「法律フランス語」、経済学部の「経済学のための総合英語」、「ビジネスワールドにおけるインタラクション」などがある。したがって、各学部の学生の多くは、学部における学習と並行して、この施設でも学び、履修した科目について所属学部から単位を与えられることになる。

この施設が提供する言語は、2009/10年度において、英語、フランス語(この2つの言語については下記3.3.1参照)、オランダ語(外国人学生向けのものを含む;下記3.3.2参照)、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、アラビア語、中国語、日本語、スワヒリ語、朝鮮・韓国語、現代ギリシャ語、ロシア語、スウェーデン語である。英語、フランス語、オランダ語、イタリア語、スペイン語については、学部所管の授業でない、この施設の独自の科目が開講されている。

#### 3.3.1. 学部間現代語施設における英語、フランス語教育

英語については、各学部の科目のほかに、2009/10年度に、以下の4科目が開講されていた:

(1) 博士号取得のために学んでいる学生のためのアカデミック・イングリッシュ

これには生物医学専攻の学生に向けたものと、人文科学専攻の学生のためのものがある。後者は120分の授業を9回受けることになっており、1クラスの定員は15人である。受講者は博士号取得のために登録してから2年目、ないしそれ以上の者で、すでに英語に熟達している必要があるが、このためにCEFRには参照されていない。

(2) 修士課程学生のためのアカデミック・イングリッシュ

これは外国人学生を対象にした科目で、書く能力の涵養に重点が置かれている。

### (3) 修士課程学生のための総合英語速成コース

これも外国人学生を対象としたもので、話す能力を与えるものである。

### (4) プレゼンテーション、会議、社交スキル、eメールの書き方、電話、面接演習 (上記4科目のうち、(4)を除く3科目は2011/12年度にも開講されている)

フランス語については、法学生のためのフランス語ブラッシュ・アップ・コースが、2009/10年度に開講されていた。2011/12年度には、このコースを引き継いだ「法学生のためのフランス語リフレッシュコース」のほかに、大学フランス語再履修コースが開講されているが、これはKULの各学部（人文学部とは限らない）において必修科目とされている、さまざまなフランス語の授業を受講する準備をするものであり、基礎文法の復習と書くこと、話すことの練習に重点が置かれている。

また、外国人学生のためのオランダ語も、この施設で教えられ、CEFRのC1を合格レベルとする「他言語話者のためのオランダ語能力テスト」がレベル5のクラスを受講した学生のために実施されている（次項参照）。これは、国外でも実施されているオランダ語能力試験である、「外国語としてのオランダ語証明書」（CNaVT）テストとは別のものである。

## 3.3.2. 外国人学生のためのオランダ語教育

### 3.3.2.1. エラスムス学生のためのオランダ語

これはエラスムス学生のみを対象とした、3か月（週当たり2回、5時間）のオランダ語入門コースで、会話練習を通じた基本的な文法と日常的な環境で用いられる語彙の習得に焦点が当てられている。こうした学習をすることにより、エラスムス学生はオランダ語圏の言語と文化に親しみ、そこで生活し仕事ができるようになる準備をすることが目標とされている。なお、単位は学生の出身校が要求することができる。

### 3.3.2.2. 外国語としてのオランダ語

これは6段階のレベルからなるオランダ語を母語としない者に提供されるコースで、それぞれのレベルが下の表のようにCEFRのグレードにより規定されている：

表3：「外国語としてのオランダ語」のレベルとCEFRグレードの対応

1（初級）	A2	
2（中級1）	A2+	
3（中級2）	B1	
4（上級1）	B1+	
5（上級2）	B2+	
6（大学レベル）	C1	

各レベルは述べ 80 時間の授業からなり、レベル 1 から 5 までは集中コースは週あたり 12 時間、通常コースは週あたり 6 時間からなる。レベル 6 の授業時間総数は 60 である。KUL でオランダ語を教育言語とするプログラムに登録するためには、レベル 5 の試験に合格している必要がある。

#### 4. 結語

KUL の人文学部における現代外国語の教育は、伝統的にヨーロッパ、ないし西欧の言語と見做されるものと、そうではないものとの間に大きな違いがある。英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、およびスペイン語の 5 つは前者に属し、文学、個別言語学、および言語とテキストの 3 つの科目が組み合わされたモジュールの形で学ばれ、また教えられる。これに対してロシア語、中国語、アラビア語など、伝統的に西欧の言語と考えられていない言語は、こうした形では教えられておらず、各専攻課程の間で、その形は統一されていない。

受講者の受け入れ、および成績評価に関する CEFR の適用についても、上記の 2 つのグループの間に差異がある。「西欧諸語」の教育にあっては、イタリア語を除き、CEFR への参照が何らかの形で行われ、特に、EU の事実上の共通語になりつつある英語(Philipson 2003)の教育においては、外国語としてのオランダ語と並んで、それがすでに完全な形でなされているのに対し、「非西欧語」の教育では、少なくとも現行年度におけるまで、CEFR への参照が全く行われていない。更に、教育言語についても、「西欧諸語」の教育においては、学ばれる言語と教育に用いられる言語が同一であるのに対し、「非西欧諸語」の教育では、教育言語はオランダ語である。

KUL における外国語教育を担う、いま一つの部門である ILT において提供されているコースについても、この 2 つの言語群に異なりがみられ、西欧諸語ではドイツ語を除き、この施設独自の科目が開講され、各学部における外国語教育を実用面で補う形になっているが、非西欧語については、そのような科目は開講されていない。

最後に、西欧諸語の専攻課程においては、2 つの言語モジュールの履修を義務付けている。学生にとって、これは多量のエフォートを要求するものだが、中等教育で学ばれる機会のさほどないイタリア語とスペイン語には、入門的な科目を設置するなど、学部が工夫を凝らしている。2 つの言語を文学、言語学、実用語学の 3 側面から同等に学ばせることは、EU の打ち出した plurilingualism (Council of Europe 2002) の目標を大学の外国語教育の分野で実現しようとする試みであると評価される。こうした 2 つの言語モジュールの履修は、非西欧語専攻課程では義務付けられていない。

西欧諸語と非西欧諸語の教育形態の間に見られるこれら 5 点の相違は、KUL の外国語教育改革と水平化が、ベルギー人にとってより身近な存在である西欧諸語教育において、はるかに進んでいることを示している。その一方で、コミュニケーションの媒体として外国語を教える、ないし言語のスキル面を重視して教育を行う科目である「言語とテキスト」が、知識としての言語を教える科目である「文学」および「(個別)言語学」と分離されず、一つのモジュールを構成していること、また職能の獲得に直接つながる、例えば通訳や翻訳の技能を与える授業が行われていな

いこと (教職課程はある)、そしてラテン語、古典ギリシャ語との組み合わせができることは、ユマニズムの伝統に基づくヨーロッパの総合大学における外国語教育の継続を示すものである。

\*ベルギーにおける現地調査の実行にあたり、アン・ブレーケルス教授 Professor Ann Brekels (KUL 現代語施設ディレクター)、リース・セルキュ准教授 Professor Lies Sercu (KUL 人文学部)、フレートル・ヴァン＝ウルティ講師 Ms Gretl Van Ourti (KUL 人文学部)、カトレイン・ブランパン講師 Dr Katrijn Blanpain (ILT) およびフランドル政府教育・青年・機会均等・ブリュッセル担当大臣官房ラフ・ドゥヴォス副官房長 Mr Raf Devos (教育担当)のご協力を得ました。記してお礼を申し上げます。

### <参考文献・関連サイト一覧>

- Charles, Ch. and J.V eger (2007) *Histoire de des université*. Paris: PUF
- Council of Europe (2002) *Common European Framework for Reference of Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge UP.
- 川村三喜男(2009) ベルギー・フランドル共同体の外国語教育政策. 富盛伸夫(編)「拡大 EU 諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」(平成 18-20 年度 科学研究費補助金基盤研究 (B)研究プロジェクト報告書).
- Philipsen, R. (2003) *English-Only Europe? Challenging Language Policy*. London and New York: Routledge.
- Vlaamse Overheid (2005/2006) *Het Vlaams Onderwijs in Beeld*.
- Vlaamse Overheid (2011) *Hoger Onderwijs in Cijfers; Aantal Inschrijvingen op 31 oktober 2011. Academiejaar 2011-2012*.
- <http://www.kuleuven.arts.be/> (accessed on 31th January 2012)

### <付録>

